



源基子と桐壺更衣

中瀬, 将志

(Citation)

國文論叢, 57:142-154

(Issue Date)

2021-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100477495>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100477495>



源基子と桐壺更衣

中瀬将志

はじめに

『栄花物語』巻第三十八は、源基子の懐妊をめぐる次の記述から
はじめまる。

一品宮（聡子内親王―引用者注。以下同）に参らせ給ひし侍
従宰相（源基平）の御女（基子）、内（後三条天皇）思しめす
といふこと世に聞えて、ただそなたになんおはしますなどい
ふほどに、ただならずならせたまへり。③④⑤①

後三条天皇皇女、聡子内親王に仕えていた基子は、後三条天皇の
寵愛を受けて懐妊する。基子の懐妊は延久二年（一〇七〇）のこ
とであり、巻第三十七の末尾に記された、後冷泉天皇の宇治行幸
（治暦三年（一〇六七）十月）との間には約三年の空白が生じる。

後冷泉天皇の崩御や後三条天皇の踐祚（治暦四年四月）には言及
がなく、「巻三十七と本巻は一連の編纂とは考えがたく、作者、成
立時期ともに異なるとみるのが通説」（新編全集頭注）とされる。
他方、『栄花物語』続編（巻第三十一―四十）の編者（作者）は一
人と見て、巻第三十七の最後に、藤原頼通と東宮尊仁親王（後三

条天皇）が不仲であったことが記され、「そのほどの御事ども書き
にくうわづらはしくて、え作らざりけるなめりとぞ人申しし」③
④②〇①④②①とあることから、「後三条天皇の治世に対して距
離をおく編者（作者）の姿勢ならびに立場がそこに立ち現れてい
る」という見方も示されている。いずれにせよ、天皇の治世を、
帝の寵愛を受けた女性の懐妊から起筆することはきわめて異例で
あり、『栄花物語』が、後三条天皇の基子寵愛にどのような意味を
認めていたかが問題となる。以下、巻第三十八以降の記述に即し
て、『栄花物語』における基子の位置づけについて考えていきた
い。

一 基子への寵愛をめぐる言説

基子の位置づけを考える際にまず注目されるのは、後三条天皇
と基子の関係に、『源氏物語』における桐壺帝と桐壺更衣の関係が
投影されていることである。たとえば、懐妊した基子が経平邸に
退出する際の様子を伝える次のような記述がある。

七月に尾張前司経平といふ人の家に出でさせたまふ。「このた

び帰りまゐらせたまはんには、更衣などにてなんおはすべき」と言ひのしる。出でさせたまふ夜は、暁までおはしまし、御供の人などのたちやすらふも、昔物語の心地す。さべき睦まじき殿上人、御送りすべき宣旨ありていとめでたし。殿はらなど、「なほ女子こそ持つべきものはあれ」などめでたまふ。母北の方も良頼の中納言の女にもしたまへば、仲らひいとあてやかに、昔物語の心地す。(③四二六)

後三条天皇が退出の夜の明け方まで基子のもとにいたことや、基子の縁者の「あてやか」さが、「昔物語の心地す」と評されている。前者の「昔物語の心地す」について、『栄花物語標注』は、「爰は、源氏桐壺に、更衣退出の所などを下に含めるなるべし。相似たり^③」と注する。「更衣退出の所」とは、光源氏三歳の年、重篤な病のため桐壺更衣が宮中から退出する箇所を指すと見られ、出産を控えた基子の退出とはやや状況が異なるものの、「その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなんとしたまふを、暇さらにゆるませたまはず」(桐壺・①二一)^④とあるように、桐壺更衣を退出させまいとする桐壺帝と、基子に執着する後三条天皇との類似性が認められるということであろう。基子の父、基平は後三条天皇の即位以前(康平七年(一〇六四))に世を去っており、その点も、「父の大納言は亡くなりて、母北の方なむいにしへの人のよしあるにて」(桐壺・①一八)という桐壺更衣の境遇に通じる。

また、「このたび帰りまゐらせたまはんには、更衣などにてなんおはすべき」という世評について、中村成里氏・岡崎真紀子氏は、桐壺更衣を意識したものと指摘する。基子は美仁親王を生んだ後、

女御となるが、そのことについて『栄花物語』は、「更衣などいひしをだに世にめでたくめづらしきことに思ひ申ししを、けざやかにめでたくいみじく、世に例なきことに、世人このごろの言種にしたり」(③四二九〜四三〇)と記している。岡崎氏は、この記述も、桐壺更衣亡き後の、「女御とだに言はずなりぬるがあかず口惜しう思さるれば、いま一階の位をだにと贈らせたまふなりけり」(桐壺・①二五)という一節を踏まえたものであり、『栄花物語』は「源氏物語」桐壺巻を想起させながら、『源氏物語』を凌駕する榮達ぶりを印象づけることによって、基子が得た境遇の素晴らしさを押しあげて描いたのである」と述べる。その通りであろう。

一方、『栄花物語』は後三条天皇の基子寵愛について、次のようにも記している。

御息所、更衣などに、皆中将、少将の女、受領のも皆参りけるを、この近き世には、おぼろけの人は参りたまはぬものに慣ひたるに、いとあさましきなり。入道殿(道長)に后、帝はおはしますものと思ふに、この関白殿(教通)、右の大殿(頼宗)だに、大臣にてこそ参らせさせたまひしか、昔に返りて、かく人の宿世も定めあるべきことかはとなるべし。

(③四二六〜四二七)

並一通りの身分の女性は入内しないことが慣習となつている中、基子への寵愛は「いとあさましき」ことであるという。後一条朝以降、道長一門(御堂流)による独占状態にあつた後宮のあり方が変化したことへの驚嘆を、『栄花物語』は率直に表現する。「昔に返りて」とあるのは、「昔物語の心地す」と響き合わせるかたち

で、「近き世」の後宮秩序が後三条朝においては成り立たなくなっていることを示しているよう。ここでは最終的に、基子の「宿世」という観点から、後三条天皇の基子寵愛を肯定的に捉えているものの、基子への寵愛が御堂流の繁栄とは相容れないものであるという認識は、後文からも窺える。御子誕生直前の記述である。

そのほどになりていたく悩みたまへば、殿上人、上達部残るなく参り、内の御使、宮（聡子内親王）の御使の、隙もなう参りちがひたり。験ありと聞かせたまふ僧をば召して遣はず。そのわたり四五町は、道もさりあへず。一の人の御女の後宮の生ませたまはんもかくこそはあらめ、思ひしより過ぎたる御有様なり。

（③四二八）

多くの人々が基子のもとに参集する賑々しさを、執政者の娘で立后した女性の出産時の様子に比するとともに、「思ひしより過ぎたる御有様」と評している。「思ひしより過ぎたる」は、「想像していた以上の」（全注釈）、「予想を越える」（新編全集）の意と解され、「一の人の御女」でも「后宮」でもない基子の出産に世人が注目していることへの意外さが示されている。

以上のように、『栄花物語』は、後三条天皇の基子寵愛を「めでたく」、かつ「あさましき」ものとして定位している。では、基子寵愛の結果誕生した実仁親王について、『栄花物語』はどのように記しているのだろうか。前掲記事の直後の一節を掲げる。

四五日つれなく明け暮れつつ、いとあさましく、いかにいかにと内にも宮にも思しめず。六日といふに、いとさららかなる男にておはしませば、さるべき人々置き所なく思さる。内の御使、宮の御使、われまづ奏せんわれまづ奏せんとぞ急ぎ

参る。かばかり年ごろいづ方にもかたかりつる御事の、めづらかにあさましともおろかなり。

（③四二八～四二九）

実仁親王の美しさを讃える「さららか」という表現は、誕生直後の敦康親王（①二八四）・親仁親王（②五一八）・敦文親王（③四七六）への讃辞としても用いられている。皇子誕生の際の定型的な表現の一つと見做されようが、実仁親王以外の三人は第一皇子であり、その誕生は特別な意味を有していたと考えられる。後三条天皇の第二皇子、実仁親王をも「さららか」と形容するのは、『栄花物語』が実仁親王の存在を重視していたことのあらわれといえようか。なお、後三条天皇の第一皇子、貞仁親王（白河天皇）の誕生については、『栄花物語』に記述がない。

光源氏誕生記事には、「前の世にも御契りや深かりけむ、世になくきよなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ」（桐壺・①一八）とあるように、「きよげ」よりも一段と上の、輝くような美しさ」（『日本国語大辞典』第二版）を意味する「きよら」が用いられている。『栄花物語』においては、皇族では憲平親王（①三四）・一条天皇（①三〇六）・敦康親王（②七二）・敦良親王（②三三七）が「きよら」と形容されるが、いずれも誕生時の記述ではない。『源氏物語』に「さららか」の用例は見られず、誕生した皇子の美しさを讃える『源氏物語』・『栄花物語』の表現はそれぞれ異なるものの、輝くような美しさを強調する点は両書に共通する。

また『栄花物語』は、後三条天皇の皇子の誕生が「年ごろいづ方にもかたかりつる御事」であったとして——実際、貞仁親王の誕生から約十八年経過している——、実仁親王の誕生を「めづらかにあさまし」と評している。実仁親王の誕生は、その契機となった

後三条天皇の基子寵愛とあわせて、二重に「あさましき」事態として描かれていることとなる。ただし、右の記述を最後に、基子寵愛に関する「あさまし」という評言は見られなくなる。実仁親王誕生の一月後、基子は女御となって内裏に参入するが、『采花物語』はかかる寵遇を「ことわり」であると述べる。

かくもてなさせたまふも、人の御ほど、御位こそ浅くものしたまひしか、侍従宰相、この齋院（斉子女王）の御せうと、小一条院の御子、堀河の右の大殿（頼宗）の御姫君の御腹、などてかわるからんと思しめすなるべし。東宮（貞仁親王）よりほかに男宮おはしませねば、心ことに若宮を思ひ申させたまへば、この女御殿をも重々しくもてなしきこえたまふもことわりなり。

（③四三〇）

後三条天皇が基子を寵遇した背景として、まず、小一条院を父に、頼宗女を母にもつ基平の血筋の良さが挙げられている。基子が経平邸に退出する条では、基子の母方の「あてやか」さへの言及が見られたが、ここでは基平が天皇家・御堂流双方の流れを汲む人物であることが確認されている。加えて、東宮以外の唯一の皇子である実仁親王への特別な思い入れから、後三条天皇が基子を重々しく処遇するのも道理であるという。実仁親王の誕生自体は、「めづらかにあさまし」きこととして捉えられるものの、その誕生を転換点として、基子への寵遇は正当化されていくのであった。

基子とともに参内した実仁親王は、後三条天皇に抱き取られる。その描写の中に、「いつしかときたなきわざをしかけたてまつらせたまへば、御衣奉り替ふるほどもめでたし」（③四三〇～四三二）とあるのは、諸注指摘するように、道長が誕生直後の敦成親王の

尿に濡れても嬉しそうにしていたという『紫式部日記』・『采花物語』巻第八の記述を踏まえていよう。「入道殿に后、帝はおはしますものと思ふに、（中略）昔に返りて、かく人の宿世も定めあるべきことかはとなるべし」（③四二六～四二七）と、非御堂流の基子が寵愛を受けたことへの意外さをあらわす先の記述から一転して、『采花物語』は、後三条天皇と実仁親王の関係を、かつての道長と敦成親王の關係に重なるかたちで、実仁親王の誕生を寿ぐのであった。

二 後三条天皇の「御心」

後三条天皇の基子寵愛を「ことわり」と評した後、『采花物語』は、後冷泉朝と後三条朝の相違に関心を向ける。

御幸ひのめでたかるべければ、制し申す人もなく、はばかりせたまひ、わづらはしかるべきこともおはしませぬほどにしも、かくおはしますにぞ。東宮よりほかに御子もおはしますなどあるほどにて、誰も誰もおろかに思ひ申させたまふべきならねど、後冷泉院にかやうのことおはしませしかば、また御子おはしませずとも、うけばりてかくはもてなさせたまはざらまし。人知れず、「さる人おはしますなり」などばかりこそは聞かせたまはまし。宇治の関白殿にはばかり申させたまはではありなましや。

（③四三二）

基子の「御幸ひ」のすばらしさゆえ、基子への寵愛を制止する者もおらず、実仁親王の誕生に至ったとする一方で、後冷泉天皇にこのようなことがあったならば、ほかに皇子がいなかったとしても、公然と待遇することはなかつただろうと述べる。『采花物語』

は反実仮想のかたちで述べるのみで、その実例を挙げることはないけれど、たとえば高階為行は、後冷泉天皇と安楽寺別当増守女の間に生まれたものの、高階為家の養子になったと推定されている¹⁰。その背景には、『栄花物語』も指摘するように、頼通に対する憚りがあったのであろう。後冷泉天皇と頼通の関係性については、後に、「後冷泉院は、何ごともただた殿にまかせ申させたまへりき」(③四三三)とも記されている。何事も頼通に委ねる後冷泉天皇に對して、後三条天皇の人となりは次のように説明される。

この内の御心いとすくよかに、世の中の乱れたらんことを直させたまはんと思しめし、制なども厳しく、末の世の帝には余りめでたくおはしますと申しけり。人に従はせたまふべくもおはします、御才などいみじくおはします。後朱雀院をすくよかにおはしますと思ひ申ししに、これはいとこよなくまさりたてまつらせたまへり。世人怖ぢ申したる、ことわりなり。おほかたの御もてなし、いと気高くおはし申しけり。(③四三四)

「すくよか」および類語「すくすくし」は、『栄花物語』において、後朱雀天皇・後三条天皇の性格を特徴づける語として用いられている。「心が強くしつかりしている」とともに、「剛直であるさま」(『日本国語大辞典』第二版)をあらわす「すくよか」は、後冷泉天皇の性格を特徴づける「なよびか」(③三七四)、「なだらか」(③三八〇)、「たをやか」(③三八三)等、もの柔らかさや穏やかさをあらわす語とは対照的なイメージを有する。そうした後冷泉天皇と後三条天皇の性格の違いが、「何ごともただた殿にまかせ申させたまへりき」という後冷泉天皇の治世と、「人に従はせたまふべくも

おはしませず」という後三条天皇の治世のあり方の相違を生じさせたというのが、『栄花物語』の理解であらう¹¹。

基子・実仁親王への寵遇は、基子の「御幸ひ」と後三条天皇の「御心」によってもたらされたものであった。基子は先述の通り女御に、実仁は誕生の約半年後に親王となっており、基子・実仁の立場は、桐壺更衣・光源氏のそれとは大きく異なっている。『源氏物語』においては、桐壺帝が、観相の結果や宿曜の勘申を踏まえ、「無品親王の外威の寄せなきにては漂はさじ」、「親王となりたまひなば世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば」(①四一)という判断のもと、光源氏を臣籍降下させたのであった。

『栄花物語』には実仁が親王となったことへの言及がなく、特筆すべき出来事とは見做されていなかったようだが、後見をもたない皇子に皇位継承の可能性を残すことは、後冷泉天皇や桐壺帝にはなし得ないことであった。後三条天皇としては、実仁親王に有力な外威がおらずとも、自らの庇護下であれば、実仁親王の将来を危惧する必要はないと判断したということであろうか。実際、実仁親王の五十日の祝に関する記述には、後三条天皇の権威の強さが示されている。

内の若宮の御五十日、四月十余日、その日の有様いふ方なし。一品宮、女御殿の女房、うち出でしわたしたり。日暮れかかるほどに、上渡らせたまふ。御供に上達部、殿上人あまたさぶらひたまふ。(中略)御前物、上達部とりつづきてまゐりたまふ。例は殿上人こそ雑役は仕まつるを、せて心ことに思しめすなるべし。左の大殿(藤原師実)抱きたてまつらせたまひて、上のくくめたてまつらせたまふほど、抱き移したて

まつる御乳母など、なまよろしからんはいとわりなかるべし。

③四三八～四三九

後三条天皇のはからいによって、実仁親王の五十日の祝においては、上達部が雑役を奉仕したという。鍾愛の皇子のため、その通過儀礼を莊重に行おうとする点で、桐壺帝が、光源氏の袴着を、第一皇子の袴着に劣らず盛大に行つたことが想起されるけれど、『源氏物語』には、桐壺帝の措置を世人が非難した——「それにつけても世の譏りのみ多かれど」(①二二)——とあるのに対して、『栄花物語』の記述からは、後三条天皇の実仁寵遇に周囲が反発した様子は窺えない。「世人怖ぢ申したる、ことわりなり」(③四三四)と評される後三条天皇と臣下の関係も、実仁親王への寵遇を可能にする条件の一つであった。

また、五十日の祝については、師実が実仁親王を抱き、後三条天皇が餅をくくめる様子も記される。敦成親王の五十日の祝では、道長室(彰子母)倫子が敦成親王を抱き、道長が餅をくくめる様子が描かれ(①四一八)、道長家の慶事としての性格が色濃くあらわれているが、実仁親王の五十日の祝においては、後三条天皇と師実の協調関係が印象づけられている。実仁親王の五十日の祝の一月前には、師実の養女、賢子が東宮に参入しており(③四三五)、師実は天皇家との結びつきを強めつつあった。師実自身も貞仁親王の東宮傳を勤めており、また、後に実仁親王の東宮傳ともなる。実仁親王の五十日の祝は、如上の師実と天皇家との関係を踏まえ、後三条天皇のみならず師実をも実仁親王の庇護者として位置づけべく描かれていると思しい。

実仁親王の五十日の祝をめぐる記述の後には、新造内裏におけ

る后妃たちの様子が記される。後三条天皇の後妃の存在に触れるのはここがはじめてではなく、基子の幸いを称揚する条にも、「中宮(馨子内親王)、女御(昭子)などおはしませど、女の御有様はかぎりあれば、いみじく思しめせども、色に出でさせたまふべきにあらず」(③四三二)と、馨子内親王や昭子が、基子・実仁親王への寵遇を快からず思うものの、それを顔色に出すことはないと言べられていた。当該箇所には、後三条天皇が馨子内親王を「やむごとなく心苦しく」(③四四〇)思っていたとあるのも、基子・実仁親王への寵遇と無関係ではあるまい。馨子内親王所生の御子はいずれも夭折しており(③四〇六・四一一)、実仁親王の誕生は、馨子内親王に複雑な思いを抱かせたと考えられる。もつとも、『栄花物語』は、馨子内親王の思惑には言及せず、馨子内親王の「御かたち、御心」や、昭子の「御かたち」の讚美に終始している。他方、基子については、再び懐妊したことを取り上げ、「めでたき有様を聞えぬ人なし」(③四四一)と、周囲の祝福する様を述べる。容貌や氣質の「めでた」さが讃えられる他の后妃とは異なり、基子の「めでた」さが、もっぱら帝の子を生むという点から捉えられていることが確認できる。ただし、この後、基子は流産する(③四四二)。

基子の「めでた」さは、実仁親王の乳母の身分の高さという点からも讃えられる。「やむことなからん人をがな」(③四四一)という後三条天皇の意向によって、藤原実宗室・藤原家範室・藤原忠俊室が乳母となったことを、『栄花物語』は、「かく君達の妻などの参ることはまたなかりつることなり。末になるままにはかくのみある世なめり」(③四四一)と評する。また、かつて道長が、

源雅通室を後一条天皇の乳母として召せうとしたものの実現しなかったことに触れながら、「この世はかく末勝りにぞ。女御殿の御有様のみぞなほなほめでたき」(③四四二)とも記している。『栄花物語』は「君達の妻」の出仕を世相の変化によるものと捉えており、後三条天皇と道長の比較を意図しているわけではなからうが、道長を引き合いに出すことよって、「末勝り」ということばは重みを増すであろう。「君達の妻」が所生皇子の乳母となった基子の「めでた」さは、後三条天皇の恩情に支えられたものであるとともに、「末勝り」の世を体現するものとしても描かれている。

乳母参集記事の直後には、聡子内親王が実仁親王を慈しむ様子や、基子の姉妹が基子に伺候したことが記される。聡子内親王は、実仁親王誕生以前にも、出産を控えた基子のため、万事につけて配慮しており(③四二七)、後三条天皇とともに、基子・実仁親王の庇護者としての役割を果たしていたと見られる。さらに『栄花物語』は、聡子内親王のおじに当たる藤原実季や、基子の弟、季宗の有様にも言及する。実季・季宗と実仁親王とのかわりが記されることはないものの、後に実季は実仁親王の東宮大夫に、季宗は東宮権大夫になる(『春宮坊官補任』)。乳母が参集したことからはじまる一連の記述は、基子の「めでた」さを讚美するのみならず、実仁親王を支える人々について集約的に記し、実仁親王が決して後見不在の親王ではなかったことを示す意義をも有している。

延久四年(一〇七二)十二月八日、後三条天皇が讓位する。『栄花物語』は、「この近くなりては重くわづらはせたまひておりさせたまふに、いとあはれなり」(③四四五)として、近時続いてい

た、重病による讓位ではないことに感嘆するとともに、「あひも思はぬ」など、弘徽殿の壁に伊勢が書きつけけんなど思ひ出でられて、何ごとにも目のみとまる」(③四四五)とあるように、宇多天皇讓位の際の伊勢の逸話を想起している。宇多天皇の例が意識されたのは、藤原氏の外戚をもたず、父子継承を実現させたという点で、宇多天皇と後三条天皇の立場が重なるためであろうか。ただし、宇多天皇の次代、醍醐天皇の御代において、藤原穩子(基経女)所生の保明親王が立太子するまで、約七年間東宮が不在であったのに対して、後三条天皇の次代、白河天皇の御代においては、踐祚と同日に実仁親王が立太子している。後三条天皇の讓位は、実仁親王の立太子を確実にするためという見方が強い¹³⁾。なお、『栄花物語』は、「帝は、いつしかおりぬさせたまひなんとのみ思しめして」(③四四四)と、後三条天皇の讓位が自発的なものであったことを記すのみで、その意図にまで踏み込んではいない。

後三条天皇の讓位の七日前、基子は准三宮(准后)となる。『栄花物語』では、讓位・立太子に関する記述の後に、「女御は三宮の位にて、年官年爵得させたまふほどなど、いとめでたし」(③四四五)と、基子が准三宮となったことを讚える一節が見える。皇族以外の後宮で准三宮となったのは基子が三人目であり、基子の前後の例——藤原欽子(教通女。後冷泉天皇女御)、生子(教通女。後朱雀天皇女御)、道子(能長女。白河天皇女御)——に鑑みると、准三宮が、後冷泉朝以降、立后の叶わない女御への優遇措置として位置づけられていることが窺える。基子の場合、実仁親王の立太子を見据えた処遇でもあったと考えられる。

所生皇子の立太子の布石として、生母を格上げするという点か

ら想起されるのは、『源氏物語』における藤壺の立后¹⁵であるが、后と准三宮との相違は看過し難い。『栄花物語』には、「今も中ごろも、納言の女の後にあたるなんなき」(①五〇七)、「一の人の御女ならぬ人の、御子おはしまさぬがならせたまふ例はまたなきこと」(③三三三)等、立后の諸条件が示される。基子は実仁親王を生んでいるものの、父基平が参議で世を去ったことが大きな障壁となつたのであろう。卷第三十八の冒頭では、「もとより帝の御母になりたまふべき宿曜ものしたまふ、御夢にも、紫の雲立ちてなん見えたまひけるなど聞ゆるを」(③四二五・四二六)と、帝の母后となることが予示され、また、実仁親王出産時には、「一の人の御女の後宮の生ませたまはんもかくこそはあらめ」(③四二八)と評されていた基子であったが、後三条天皇の寵愛をもつても、実際に后となることはなかった。立太子した実仁親王が、光源氏というよりは冷泉帝の立場に接近していくのに対して、基子は桐壺更衣以上の栄達を遂げながら、藤壺と同等の地位にまで昇ることはなかった。巻冒頭から、「桐壺帝―桐壺更衣―光源氏」に準えて描かれた(後三条天皇―源基子―実仁親王)の関係は、依拠すべきものを失い、叙述は平板化していく。実仁親王の立太子や基子の准三宮は、後三条天皇の譲位に付随する出来事として記されるにとどまり、事象相互の関係を浮かび上がらせようとする意識は見出し難い。

譲位の翌月(延久五年正月十九日)、基子は輔仁親王を産する。『栄花物語』の記述は、

梅壺女御、またいとうつくしうめでたき男宮生みたてまつらせたまへり。尽きせずいみじき御有様なり。院の例ならずお

はしませば、いと華やかなることはなし。

(③四四六)

と、実仁親王の誕生時より簡素なものとなり、輔仁親王の美質を讃えるとともに、後三条院の不予により、祝儀が華やかに行われなかつたことを伝えている。実仁親王の五十日の祝が、後三条天皇主導のもと盛大に行われたことは対照的である。

同年五月七日、後三条院は崩御する。『栄花物語』には、後三条院の皇子女や、後三条院の母、禎子内親王が途方に暮れる様子ならびに、聡子内親王や基子等、後三条院ゆかりの女性が相次いで出家したことが記される。基子については、聡子内親王とともに、「若くめでたき御髪どもを削がせたまひて、いかにめでたくおはしますらん。かたち変へつれば、四五十の人だに若くこそ見ゆれ、ましていかにおはしましけん」(③四六〇)と、若くして尼削ぎ姿となつた美しさが讃えられているものの、基子の悲嘆が特筆されることはない。その後も基子が話題の中心となることはなく、後三条院を悼む人々の和歌贈答をもつて卷第三十八は閉じられる。

三 後三条院崩御の後

白河朝の動向を記す卷第三十九においては、基子は登場せず、実仁親王が敦文親王誕生記事と教通薨去記事の二箇所て話題にのぼる。敦文親王は、承保元年(一〇七四)十二月二十六日、白河天皇と賢子の間に生まれる。その誕生記事は、「中宮(賢子)は、今しばしとのみ惜しみ留めたてまつらせたまへば、えまかでやらせたまはで、ほど近くなりてぞ出でさせたまひける」(③四七六)とあるように、白河天皇が、出産直前まで賢子を里第に退出させなかつたことを伝え、また、「いときららかなる男御子にておはし

ませば」(③四七六)と、敦文親王の輝くような美しさを讃える等、実仁親王の誕生記事に類似する。さらに、敦文親王の産養について、「後一条院の御産屋に紫式部のいひつづけたる、同じことなり」(③四七七)と記し、敦成親王の誕生記事を彷彿させる点も、実仁親王誕生記事に通じるものがある。ただし、このとき賢子は既に中宮となっており、実仁親王出産後に女御となった基子とは立場が異なる。「年ごろ、位におはしますに、かかる御仲らひに男御子の生れさせたまへるは久しくなかりけるに、いとめでたし」(③四七七)と、天皇と中宮の間に久しぶりに―敦良親王(一条天皇中宮彰子所生)の誕生以来六十五年ぶりに―皇子が誕生したことを慶祝する一節は、(白河天皇―賢子―敦文親王)の関係が、(一条天皇―彰子―敦成親王・敦良親王)の関係に重なることを印象づけるものであらう。

敦成親王の誕生が、道長にとって「栄花の初花」(②二四)であったのと同様に、敦文親王の誕生は、師実が栄達する端緒となった。『栄花物語』の関心は、敦文親王周辺の「めでた」さを讚美することに向けられ、実仁親王については、敦文親王の誕生後の様子を記す中で、次のように簡単に触れるのみであった。

御五十日、百日などいはん方なくめでたくて過ぎゆく。東宮(実仁親王)、三の宮(輔仁親王)も、御年のほどよりはものをうつくしうのたまはせ、あさましくおとなしくぞおはしましける。この若宮(敦文親王)もいとめでたくおはしませば、殿の上(師実室麗子)つと抱きたてまつらせたまへり。上も片時立ちのかせたまはず、もてあそばしたてまつらせたまふ。(③四七九)

敦文親王の五十日・百日の祝が盛大に行われたことを記した後、敦文親王と年齢の近い実仁親王・輔仁親王の成長ぶりを強調している。もつとも、話題の中心はすぐさま敦文親王へと移り、麗子や白河天皇が敦文親王を愛育する様子を描くことを通して、敦文親王の後ろ盾の強さが示されている。

もちろん、実仁親王にも、禎子内親王・聡子内親王や基子の親類、東宮大夫藤原能長(実季の前任)等の後見はいたけれど、巻第三十九において、実仁親王を支えた人々の動向はほとんど顧みられない。唯一、実仁親王との関係が描かれるのが、藤原教通であった。『栄花物語』は、教通の薨去(承保二年九月二十五日)に関連して、晩年の後三条天皇と良好な関係を築いていた教通が、後三条天皇に対する思いから、実仁親王の行啓に供奉したことを伝える(③四八二)。教通と後三条天皇が親密な関係にあったことは、後三条天皇が讓位の後、教通の邸宅である二条殿に遷御した(③四四五)ことから窺える。『扶桑略記』によれば、このとき実仁親王も二条殿に遷っていたようだが、『栄花物語』には言及がない。教通と実仁親王の関係は巻第三十九ではじめて描かれるわけであるが、両者の関係が示されることによって、教通の薨去が、実仁親王にとっては庇護者の喪失という意味を帯びることが明らかにされる。師実が、教通の薨去に伴い空白に任じられ、権勢を強めていくことと表裏をなすように、実仁親王の立場は不安定になつていくのであった。

その後、敦文親王の薨去、善仁親王(のちの堀河天皇。賢子所生)の誕生、賢子の崩御、実仁親王の薨去、善仁親王の立太子・受禪と状況は目まぐるしく変化する。『栄花物語』は、実仁親王の

薨去について次のように記す。

その年、裳瘡といふこと起りて、子ども、若き人など、いみじう病むに、東宮重くわづらはせたまひて、応徳二年十一月八日にうせさせたまひぬ。あさましくいみじう、近くは聞えぬことなりかし。女御殿、一品宮など嘆かせたまふさまことわりなり。いひやるべき方なし。宮づかさ、さるべき親族など、時失ひたる山賤にて、いかにとこそ。内にもあはれにいみじく思しめさる。うち続きあさましき年なり。

(巻第四十・③五一—四)

「近くは聞えぬこと」と評されるように、東宮薨去の例は、醍醐朝の保明親王(延長元年(九三三)・慶頼王(延長三年)まで遡る。醍醐朝においては、保明親王薨去の後、穩子(保明親王母、慶頼王祖母)が中宮となることよって慶頼王の立太子を導き、また、慶頼王薨去の後には、穩子所生の寛明親王(のちの朱雀天皇)が立太子しているように、皇位継承者には一貫して穩子の子や孫が選ばれた。かかる措置は、醍醐天皇や穩子のみならず、穩子の兄で当時の上であった忠平の意向とも無関係ではないだろう。他方、実仁親王薨去の後、師実が、善仁親王を差し置いて輔仁親王の立太子を後押しすることは考え難い。実仁親王の薨去に関連して、基子・聡子内親王の悲嘆を「ことわりなり」と評するとともに、実仁親王の宮司や近親者を「時失ひたる山賤」と位置づけているのは、実仁親王の薨去が、親王周辺の人々——白河天皇の叔父、実季は例外か——にとって政治的敗北に等しいことを、『栄花物語』がよく理解していたために他ならない。なお、「時失ひたる山賤」という表現は、諸注指摘するように、『源氏物語』須磨巻に

おいて、須磨に退去する光源氏が東宮(のちの冷泉帝)に贈った歌、「いつかまた春のみやこの花を見ん時うしなへる山がつにして」(②一八二)を踏まえたものであろう。ともに、逆境にある者の侘しさをあらわしているものの、光源氏が、「春のみやこの花」に、「春宮の栄える世」の意をこめ(新編全集頭注)、冷泉帝の御代を見ることへの思いを捨てきれないのに対して、実仁親王に近しい人々が、実仁親王の治世を見ることはもはや叶わない。実仁親王とその近臣、冷泉帝と光源氏の関係は、部分的に重なりつつも、実仁親王は即位することなく世を去り、その近臣は光源氏のごとき「朝廷の御後見」(明石・②二六二)とはなり得ないのであった。

実仁親王の薨去に対しては、白河天皇も胸を痛めていたという。後文に、「うち続きあさましき年なり」とあるように、前年の賢子の崩御に続く悲痛な出来事として、実仁親王の薨去が位置づけられている。実仁親王薨去の翌年、善仁親王が立太子・受禪するわけであるが、『栄花物語』は、皇位継承に関する白河天皇の思惑がどのようなものであったかについては一切触れず、讓位の前後、白河天皇が悲しみに暮れる様子を記すことに終始している。輔仁親王立太子の可能性が皆無ではない中、皇位継承問題を表面化させないよう、記述内容の取捨選択がなされたと見るべきか。

もっとも、堀河天皇の即位以降にも次のような一節が見え、輔仁親王の存在感が消え去っているわけではない。

御禊十月二十一日なり。(中略)撰政殿(師実)をはじめたてまつりて、残りたまふ人なく仕うまつりたまへり。殿の上(麗子)、姫宮たち、院(白河院)、前斎宮(暉子内親王)などみ

な御棧敷にて御覽す。陽明門院（禎子内親王、四の宮（篤子内親王）なども御覽じけり。梅壺の女御（基子）、東宮の御事を思し出づらんかし。三の宮御元服せさせたまひて、いとまよげにおとなおとなしくおはします。

（③五二七～五二八）

堀河朝の大嘗会御禊（寛治元年（一一〇八七））に関する記述である。師実以下の貴族が供奉し、麗子らが見物に訪れたことを記すとともに、基子の心中を、実仁親王のことを偲んでいるのであると付度している。『栄花物語』は、堀河天皇周辺の華やかな様子のみならず、実仁親王の即位が実現しなかったことに対する基子の無念さにも光を当てるのであった。また『栄花物語』は、元服した輔仁親王の様子にも言及する。輔仁親王の元服は、寛治元年六月二日に行われており、大嘗会御禊と順序が前後するものの、基子周辺の動向をまとめて記そうとしたものである。輔仁親王を、「きららか」でも「きよら」でもなく、「きよげ」と評している点に注意されるが、『栄花物語』続編においては、「きよげ」は後朱雀天皇（③三二七）や師実（③三三三）、章子内親王（③四一四）等に対しても用いられる最大級の讃辞であった。『栄花物語』にとつて、輔仁親王が看過し難い存在であったことを示している。一方、基子の心中への付度を通して、実仁親王の不在が確認された直後にもかかわらず、『栄花物語』は輔仁親王の立太子の可能性に言及しない。輔仁親王を讃美はしても、実仁親王の後継者として位置づけてはいない点に、白河院・師実方に寄り添う『栄花物語』の立場があらわれている。堀河朝の東宮位は、康和五年（一一〇三）に宗仁親王（鳥羽天皇）が誕生、立太子するまで

空位であり、基子が后、国母になるという卷第三十八冒頭の予言は、実現の可能性を微かに残しながら、ついに叶うことはなかった。

おわりに

後見の弱い基子が後三条天皇の寵愛を受けたことは、「近き世」に例のない事態であった。『栄花物語』は、御堂流繁栄の歴史にそぐわないこの出来事を描く枠組みとして、基子と桐壺更衣の境遇の類似性から『源氏物語』桐壺巻を利用したと思しい。やがて基子・実仁親王は桐壺更衣・光源氏以上の栄達を遂げ、『源氏物語』の世界との隔たりが生じるようになる。基子の「幸ひ」や後三条天皇の「御心」への言及は、当時の貴族社会の常識からも、『源氏物語』における桐壺更衣・光源氏のあり方からも外れた基子・実仁親王の栄達を必然化するためのものであったといえよう。

基子・実仁親王の栄達のピークは、後三条天皇の讓位に伴い、それぞれ准三宮・東宮となったことであろうが、それ以降、『栄花物語』は基子・実仁親王にほとんど関心を示さなくなる。最大の庇護者である後三条院が世を去ったことや、白河天皇の御代となり、賢子やその所生皇子の存在感が強まったことがその要因である。卷第三十八では、後三条天皇と実仁親王の関係が、道長と敦成親王の關係に重ねて描かれていたけれど、卷第三十九においては、敦成親王の誕生が、敦成親王誕生記事を踏まえて記されている。敦成親王に重なる存在が、実仁親王から敦成親王へと据え直されており、実仁親王の立場はむしろ、有力な後見不在の状態で執政者（道長・師実）の外孫（敦成親王・敦成親王）と対峙す

るといふ点において、敦康親王（藤原定子所生）の立場に近いものとなる。後見の弱さから立太子が叶わなかったという点では、敦康親王と輔仁親王の境遇も重なる。

基子は、長承三年（一一三四）七月二日、輔仁親王男源有仁——『今鏡』において光源氏に擬される——のもとで薨じる（『長秋記』）。輔仁親王は、基子の薨去以前（元永二年（一一一九）十一月二十八日）に世を去っていた。皇子を遺して早世した桐壺更衣や定子に対して、基子は帝位に就く可能性を有しながらそれが実現しなかった二人の運命を見届けることとなる。

注

- (1) 『栄花物語』の引用は、新編日本古典文学全集による。
- (2) 福長進『栄花物語』続編と『大鏡』（『歴史物語の創造』笠間書院、二〇一一年、初出二〇〇四年）
- (3) 本位田重美・清水彰編『住吉大社蔵・佐野久成著 栄花物語標注 下』（笠間書院、一九八二年）
- (4) 『源氏物語』の引用は、新編日本古典文学全集による。
- (5) 中村成里「後三条」（『平安後期文学の研究—御堂流藤原氏と歴史物語—仮名日記』早稲田大学出版部、二〇一一年、初出二〇〇六年）
- (6) 岡崎真紀子「『源氏物語』と院政期の歴史叙述——『栄花物語』巻三十八「松のしづえ」をめぐる——」（『やまとことば表現論——源後頼へ』笠間書院、二〇〇八年）
- (7) 伴瀨明美「院政期における後宮の変化とその意義」（『日本史研究』四〇二、一九九六年二月）
- (8) 三谷榮一「清明の美」（『物語文学史論 新訂版』有精堂、一九

六五年）

- (9) 高橋麻織「歴史物語における「源氏」の位相—創造される（歴史）——」（『源氏物語の政治学—史実・準拠・歴史物語』笠間書院、二〇一六年、初出二〇一二年）
- (10) 角田文衛「後冷泉天皇の皇子」（『王朝の明暗』東京堂出版、一九七七年、初出一九七一年）
- (11) 福長進『栄花物語』続編について」（『前掲書』②、初出二〇〇二年）
- (12) 古記録の記述からは、実仁親王と聡子内親王が居所を同じくし（『水左記』承暦四年（一〇八〇）十月二十三・二十四日条、『為房卿記』永保二年（一〇八二）三月二十五日条、また、聡子内親王が実仁親王の副臥の選定に関与する（『帥記』永保元年六月十一日条）等、後三条天皇崩御の後も、実仁親王と聡子内親王が密接な関係にあったことが知られる。
- (13) 後三条天皇の讓位については、河内祥輔「後三条・白河「院政」の一考察」（『日本中世の朝廷・幕府体制』吉川弘文館、二〇〇七年、初出一九九二年）、美川圭「後三条天皇—中世最初の帝王」（『古代の人物6 王朝の変容と武者』清文堂、二〇〇五年）参照。
- (14) 檜山和民「准三宮について——その沿革を中心として——」（『書陵部紀要』三六、一九八五年二月）
- (15) 浅尾広良「藤壺立后から冷泉立太子への理路」（『源氏物語の皇統と論理』翰林書房、二〇一六年、初出二〇一二年）、福長進「冷泉立太子と藤壺立后」（『文学』一六一、二〇一五年一月）
- (16) 福長進『栄花物語』に見える立后条件」（『むらさき』四九、二〇一二年十二月）
- (17) 瀧浪貞子「女御・中宮・女院—後宮の再編成—」（『論集平安

文学 3 平安文学の視角―女性― 勉誠社、一九九五年)

- (18) 『今鏡』には、実仁親王亡き後、「御はて過ぎて、人々散りける」状況での、行尊(基子の弟)と常陸の乳母(実仁親王の乳母)の和歌贈答―思ひきや春の宮人名のみして花より先に散らむものは(行尊)、花よりも散り散りになる身を知らで千歳の春とたのみけるかな(常陸の乳母)―が載る(みこたち第八・源氏の御息所。引用は、海野泰勇『今鏡全釈 下』(福武書店、一九八三年)による)。

- (19) 龍肅「三宮と村上源氏」(『平安時代』春秋社、一九六二年)

【付記】

本稿は、歴史物語研究会二〇一九年九月例会(二〇一九年九月十四日、於明治大学)における同題の口頭発表をもとに成稿したものです。席上でご教示を賜りました諸先生方、とりわけ福長進先生に厚く御礼申し上げます。

(なかせ まさし) 神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程修了)